昭和十年一月二十五日印刷
昭和十年二月十日發行
〔隔月發行〕
第四號

社會學評論

日本社會學號

小山　隆　日本社會學の科學的意義……一
陳　紹馨　日本社會學におけるドイツ的なるもの…一八
馬場啓之助　日本に於ける經濟社會學の問題……三〇
櫻井武雄　日本農村社會學批判……五一
武田良三　宗教社會學に於ける二つの型……六〇
早瀨利雄　社會學批判の精神について……六六
新刊紹介——社會學概論の業績……八〇
一、灘波紋吉著『社會學要義』（馬場啓之助）
二、圓谷弘著『集團社會學原理』（早瀨利雄）
吉永清篇　本邦社會學文獻目錄……一—二〇

東京　同文館　發行

日本社會學に於けるドイツ的なるもの

陳紹馨

社會學に關する限り日本はドイツの勢力範圍下にある。現在において多かれ少かれドイツ社會學の影響を受けない社會學はないであらう。我國における社會學の輸入はかなり早くから行はれた。明治維新における國家改造當時、立憲的自由主義傾向の人はミル、スペンサアの思想を輸入し、急進的分子はルソーの、官僚的國家主義的古人はグナイスト、シュタイン等の思想をそれ〴〵輸入した。その後英佛の社會學が漸次輸入され英佛的な體系が構成されるに至つたが、歐洲大戰後ドイツに形式社會學が隆盛を極めた時にドイツ社會學が輸入されて爾來我が學界を支配した。現在の日本社會學において英米佛の體系は寧ろ副次的なものになつてゐる。（こゝで謂ふ日本社會學は『日本的社會學』のことではなくして日本に行はれてゐる社會學のことであり、且つその代表的なもののあるものを問題にするに止まることを斷つておく）。

ドイツは元來社會學にとつて不毛の地であつた。フランスにおいてコントが綜合的な社會學を構成した時に國家學に對して副時的な『ドイツ社會科學』がシュタイン、モール等によつて構成された。『ドイツ社會科學』は現在殆ど忘れられてゐるが（尤も近時その二三が新に問題にされてゐるが）當時かなり盛況を呈して機關なども發刊され、十九世紀の六十年代まで行はれた。七十年代に英佛の綜合社會學がドイツに輸入され

ドイツに綜合的な體系がシエフレ等によつて獨立に構成された。七・八十年代にザムタア、ベーレンバツハグムプロウイツチ等が綜合社會學とドイツ社會科學とを綜合集成し、歐洲社會學史上にドイツは顯然たる一存在となるに至つた。近世のイデオロギーの主潮は市民階級のイデオロギーであつて、市民階級の隆盛と共にイデオロギーも繁榮した。市民階級の發達のおくれたドイツにおいてイデオロギーの發達もおくれたが、十九世紀後半以後ドイツ市民階級が急激に躍進すると共にドイツの社會學も飛躍した。ドイツは辯證法の國である。老ゲーテは彼の時代のドイツの慘狀を慨嘆してもしベルリンがパリーのやうに榮えたらそれこそ奇蹟だと述懷したが、半世紀の内にドイツは政治的にフランスを屈服せしめ、學術的にフランスと覇を爭ふに至つた。ドイツ統一後における新しい生活關係の展開と共に學術も面容を新にし、十九世紀の末葉に舊い社會學を批判した『新しい社會學』がディルタイ、テンニース、ジンメル等によつて構成された。ドイツにおいて社會學が隆盛を極めたのは併し歐洲大戰後であり我が學界を支配したのも大戰後のドイツ社會學である。

社會學におけるドイツ的なるものは何であるか。更にドイツ的なるものは一般に如何なるものであるか、特質は時代によつて變動するから簡單に規定することは困難であるが、併しなほその特徴的な傾向を指摘することが出來る。マルクス、エンゲルスは彼等の『ドイツチエ・イデオロギー』において英佛と對照してドイツ的なイデオロギーの特質を指摘してゐる。同じ事態をフランツ・オツペンハイマアが克明に敍述してゐる。中世において中央ヨーロツパに位するドイツは、南歐から北歐へと、また東歐から西歐への交通の要路に當り、都市は繁榮し商業は殷盛であつた。大陸發見及び航海熱の時代以後、貿易の要路はドイツより地中海に移つて、ドイツの商業は凋落するに至り、新興のスペイン、フランス、オランダ、イギリスに壓迫されるに至つた。他方において、宗教戰爭の名の下に行はれた××と土地貴族との永い戰爭は、ドイツを全く荒

廢せしめた。都市にはツンフトの規則によつて窒息せしめられた手工業と不振な小工業が存在するのみで、西歐において精神及び經濟の自由のために鬪爭した第三階級を構成する大市民は存在しなかつた。英佛の啓蒙運動のトレーガァは有力な意識的な世俗的な自由な市民であつたが、かゝる階級を缺くドイツにおいては、國家の官吏か、卽ち法律家、僧侶、學校教師等がその任に當つた。かゝる狀態は約一世紀半繼續した。この事態に基いてドイツのイデオロギーは英佛のそれと比較して著しい特色を持つものでなければならぬ。絕對君主々義への鬪爭に從事する英佛のイデオローゲンにとつて國家は社會に對立するものであるが、國家の官吏であるドイツのイデオローゲンにとつて國家は社會の上に優越するものである。國家より所定の俸給を支配されてゐる官吏は生存競爭の俗惡な世界から緣遠く從つて物質的經濟的要素は彼等にとつて人類生活の副次的なるものにすぎない。その上に、英佛のイデオローゲンが主として數學者、自然科學者、大商人であるのに對して、ドイツのそれは主として哲學者であり、殊に北ドイツの新敎の神學者であつた。新敎の哲學は聖書の人格神と啓示に對して不信を披瀝したが、歷史哲學を論述するために彼はこれの代りになるものを求めなければならぬ。彼等は『イデー』を提出し、これを以て總てのものを支配するものとした。ドイツ觀念論がドイツ思潮の基調となつて以來『イデー』は人間生活の各部面を支配するものとなつた。

特殊的な歷史的背景によつて顯著な特徵を有つたドイツ的なイデオロギーは、時代によつて種々の異つた役割を演じた。カントにおいてそれは進步的な役割を演じた。封建的絕對君主的なるものの本陣にきり込む力を有たないドイツの市民は、論理の世界において反抗した。カント哲學はドイツ的なフランス革命でありこの意味において進步的であつた。觀念論的なドイツ的イデオロギーはドイツ市民階級の隆盛と共に一時影をひそめた（哲學史上の所謂唯物論、自然科學の隆盛の時代）。市民階級が新に有力な敵を迎へなければなら

ぬ時にそれは反動抑壓の武器として新に重用されるに至つた。而して社會學におけるドイツ的なものは後者に屬するものである。

ドイツ的なるものを檢討するに當つて我等はその功過共に看過してはならぬ。觀念界における活潑な活動の結果としてドイツ的思惟は著しく論理的方法的になつた。これは所謂 deutsche Grundsätzlichkeit にもよるものであらうが、とにかくドイツ的思惟、從つてその一分脉たるドイツ社會學は英米佛のそれに比べて著しく論理的方法的である。英米佛の社會學は概して方法的にルーズであり不徹底であつて、多くは社會學體系といふよりも社會學資料集の觀がある。それらは社會學と哲學との混可を排斥し、ドイツ社會學に對して寧ろ侮蔑的である。英佛の傳統を引く日本の社會學者も社會學と哲學との混同を慨嘆してゐる。(例へば『社會學徒』第八卷第十一號一三頁參照)だが、哲學的反省なくして社會學を、進んで科學一般を研究し得ると思ふのは素朴的な經驗論や實證主義を以て唯一の科學的な立場とするものに他ならぬ。これらが如何に不徹底であり中途半端であるかは既に觀念論的な哲學の批判したところであり、また實證主義的な諸體系自らが暴露したところである。社會の研究において社會の概念や範疇に關する哲學的思惟をめぐらさずに經驗的な事實に專ら賴らんとするのが實證主義的な立場である。たがその際の所謂經驗的事實は無數の事實の內から選擇されたものであり、而してその選擇には一定の基準が前提されてゐる。實證主義においても基本的な概念や範疇は無意識的に前提されてゐる。コントの實證主義を非實證的であると評したデュルケムは、社會の範疇に關するスコラ哲學的な議論を避けるために『社會事實』の暫定的な規定を提出したが、議論の進展と共に暫定的規定は社會の本質として取扱はれ、その規定の不充分のために集團表象の基體に關する方法的な反省はついに社會形態學といふ重要な曖昧な問題を殘した。ドイツにおけるアメリカ的な存在フォン・ウィーゼは謂ふ、社會の概念如何は結論において求めらるべきもの

で敍述の當初に問初に問はるべきものではないと。だが、彼はその著書の初めに人間生活の三領域の一つとして社會界を定立しそれに基いて體系を展開してゐる。彼はジンメルの後繼者と自認してゐるが、哲學きらひな彼はジンメルの認識論的な社會學を眞に理解してゐないやうである。

社會學の方法論的反省を明確に呈示したのはジンメル、マックス・ウエバアである。複雜なる社會事象を我等はそのまゝ模寫することは不可能で、認識は一定の見地、一定の範疇に基いて事象の內からあるものを抽出し以て一つの統一的な世界に構成する。卒然に社會事象に臨んでも我等は何事もなし得ず、基本的な見地が前提されて初めて社會的認識が可で能ある。ゾンバルトはこのジンメル的な立場を代表する一人である。マックス・ウエバアもこの點に關しては見解はほゞ同樣である。彼の理想型の概念はかなり多義的であるが、要するにそれは文化認識において必然的に前提されなければない。法則的知識である。今まで多くの社會科學者は無意識にこの法則によつたが、ウエバアはこれを方法論的に闡明した。日本社會學はこの點においてドイツの影響を受けてゐる。『社會學概論』における高田博士はその代表的なものである。博士は『社會關係の研究』においてマックス・ウエバアと現象學によつて方法を徹底化された。こゝにも我等はドイツ的なるものゝ影響を看取する。

ジンメルやウエバアの方法は併し論理主義の哲學者の指摘したやうに、不徹底なところがある。社會認識における見地や範疇の重要性は明瞭な事實であるが、然らばこの見地や範疇は如何なるものであるか。新カント派の傳統を引く彼等はこれを先驗的なものと見てゐるが、併し具體的な社會生活に着目する彼等はこれを純粹に先驗的なるものとする譯でもない。ジンメルにおいて見地や範疇は先驗的でありながらもしかも歷史的社會事實に照應するものであり、歷史的發展に依存するものである。マックス・ウエバアの理想型は一方において見地の高昇によるものであるが他方におい

て實在の一定要素の高昇によるものである。先驗性と經驗性との中間を彷徨する彼等の見地や理想型が不徹底として非難されるのは當然である。この不徹底を補ふものとして呼び出されたのが現象學である。見地や理想型は本質直觀によつて不可容疑的な原現象として定立されるに至つた。だが、社會學において驅使される限りの現象學的方法を我等はあまり信用することが出來ない。ある學者にとつて社會の究極的事實であり原現象であるものは他の學者にとつてそうではない。結局ある基本的な範疇をこれは本質直觀による原現象だと稱して肯定したにすぎない。

ジンメルやウエバァの方法は併しその觀念論的な面被をはいでしまへば科學的な方法に到達し得る。範疇は現實的な生活關係に基いて構成されたものである。認識は複雜な事象をそのまゝ模寫するのではなくして思惟によつて現象の奥に存する本質的關聯を發見することを任務とする。ある事象を研究するに當つて我等は資料を細大漏さず檢討してその關聯を明かにし、頭腦の内でこれを作りかへて(ウムビルデン)基本的な範疇を確立する。研究が終つて初めて體系的な敍述がなされるが、その際抽象的な範疇は前提されて漸次具體的に展開されて行く。實證主義者が基本概念の前提さ反對するのは研究と敍述の手順を看過したものに他ならない。ドイツ社會學の方法論は科學的方法の一歩前にある。これは社會學におけるドイツ的なるもの、『西歐的』なるものよりまさるものに數へられやう。

ドイツ的イデオロギーの觀念論的性格を我等は前に指摘したが、この特徴をドイツの社會學者は充分に意識してゐる。彼等は自國の社會學を『精神科學的社會學』『精神學的(ノオーロギシュ)社會學』と稱して英佛の『自然主義的社會學』『西歐社會學』と區別してゐる(ゾムバルト等)。社會生活における本質的なもの純粋なものを追求する彼等は、非本質的なもの非純粋なものを漸次排除した。ウインデルバント、リッケルトが文化と自然とを峻別して以來、社會は自然ではなくして文化であることがくりかへして主張されて來た。文化としての

社會の基礎は人間の心意に求められる。既にテンニースは人間關係を分析して本質的なものを意志に發見しジンメルは社會の社會たる所以を心的相互作用に求めた。綜合的な社會學では自然的物質的なものはなほ社會の契機に數へられたが、こゝに至つて物質的なものは非本質的として排除され、社會は人間の心の中に追ひこめられた。この『新しい社會學』の傾向はドイツのみでなく、ほゞ同時代にアメリカ、フランスにも現れた。ギッディングスは社會を物質的及び心理的の兩方面に分け後者を以て本質的なるものとした。タルドは社會を模倣に解消し、デュルケムはくりかへして社會は人間の心の中にあることを强調した。併しドイツ人はこの傾向を一層徹底的に遂行した。社會は人間の心意に存すると謂つてもそれは心理的な過程的なるものに存するのではなくして精神的な精神學的な部面に存する。精神科學が社會の基礎付けに參加し、更に有力な方法として現象學が動員された。社會がジンメルの謂ふやうに斷續的な心的相互作用であるならば、それは睡眠中に消失して了ふ。これは一つの重大な難點である。この難點の克服のために現象學派の社學者は社會關係を意識背景又は意識自體に求め、かくして社會を基礎付けたのである。

日本社會學はこの點においてドイツ社會學の衣鉢をついでゐる。高田博士は形式社會學を批判されて社會を『望まれた共存』と定義し、更に『社會關係の研究』においては『不定限の接觸の用意』と定義された。社會關係は『人々の間に取りかはさる態度の用意』であり、『何ものかの行はれる狀態』、『一定の態度が人と人との間に實現されるばずの姿』である。接觸の用意は明瞭なる意識範圍の事柄でなくて主に意識背景又は意識自體における事柄であらうから、意識內容の去來とはある程度まで沒交涉に存續する。この態度は相手に對する身のむけ方であり、たゞに行爲ばかりでなく感情又は不作爲としても表はされる。而してある態度の用意はその態度に出た時、卽ちその態度を實現した場合に、最も完全になつたのである。博士はドイツ的

に社會を徹底的に基礎付けられた。

社會關係を意識背景または意識自體における關係と解することによつて社會の客觀性は一應基礎付けられたのであるが、我等は併しこれに首肯しがたい。殊にこの立場に基いてなされた說明や導かれた原理（例へば後にふれる結合上位說の如き）に臨むときに我等は益々これを信用することが出來なくなる。この立場の成立の經緯を尋ねることによつて我等は愈々その眞相をきはめることが出來る。

人間行爲の一切の事象は頭腦を通して行はれる。生活過程における諸關係は頭腦においてそれに對應する關係の概念を有つ。事象を探求すると稱する哲學者は彼等の方法的な純化の過程において事實的な生活關係を非本質的なものとし、頭腦におけるその反映的な概念上の關係を唯一の實在的なものとした。一切の現實的な關係は彼等にとつて諸々の觀念となる。『諸關係は法律學、政治學等においては、即ち意識においては諸概念とたる』（マルクス）。社會に關しても然りである。具體的な生活關係の概念的な反映は社會の本質として、つひには社會のものとして確立された。併しながら觀念上の關係は客觀的な生活過程の概念であり、觀念的な關係の根據を非本質的なものとして排除する限り社會の客觀性は何處にも求められない。生活過程における關係は意識上の關係として現れるが、關係の根據は意識そのものにあるのではなくして生活過程そのものに存する。我等は無意識に多くの人と關係を結んでゐる。更に進んで我等は不本意ながら多くの人と關係を結んでゐる。我等が『接觸の用意』を有たうと有つまいとにかゝはらず我等は必然的に他人との交渉に立入らなければならぬ。『一定の態度が人と人との間に實現せれらる』のは要するに客觀的な物質的な生活關聯が我等を結びつけてゐるためである。心における關係やれに伴ふ情操は客觀的な生活過程の變化と共に變る。肉親でも親友でも相去るものは日にうとくなり關係がうすくなる。事實的な接觸や協働があつて初めて社會關係が結ばれるのであつて、社會關係の考察に

おいて常に決定的な現實的な生活過程に着目しなければならぬ。もとより人間生活の極度に分化した現在において確固たる物質的基礎に基かない關係が結ばれることはあるが人間生活を決定する重要な諸關係はそれ〴〵の物質的根據に對應するものであり、この根據を捨象する限り社會は幽靈に化してしまふ。

社會學において强調される社會範疇としての關係概念の重要なことは無論看過されてはならぬ、既にマルクスは社會は『人と人との關係』であり、社會的とは『その條件、方法、目的の如何を問はず、多くの個人の複合作用』であることを指摘した。經濟學はマルクス、エンゲルスにとつては人間關係を研究する科學である。彼等における關係概念の强調の故を以てモイゼルの如きは彼等の體系を『關係科學』(Beziehungswissenschaft)とよんだ。だが、彼等　謂ふ關係はもとより形式社會學のそれと同一視さるべきものではない。關係は『常にものに結びつけられ、且つものとして現れる。』人間の諸關係は『彼等の現實的な生活過程の諸問題』である。(社會は關係であるとはマルクスにとつて一つの抽象的な規定である。この抽象的な規定が展開されて具體的な社會形體の概念に到達するのであるが我等はこゝでは立入らない)。觀念上の關係と共にその物質的な關係に着目し、更に進んで物質的な關係から觀念上の關係を說明して初め社會のありのまゝの姿が把握され、その構造と共にその發展が明確に說明されるのである。このことは具體的な歷史的な問題に當るときに最もはつきり證明される。かくて我等は改つて社會の客觀性を證明する必要なく、睡眠中に社會の消失することを危懼する必要もない。この點についてドイツ的なるものは止揚されなければならぬ。

人間の頭腦は巧妙な魔術師である。現實的な關係に基いて概念が一旦構成された後に諸概念は自由に結びつき自由に分離して變幻極りない飛躍をする。觀念的なものは理想的なものになり人倫的道德的なものなる Deutsche Idealismus はドイツ觀念論であると共にドイツ理想主義である。そしてこの理想的人倫的なものは

實に巧妙な武器として用ひられる。かつてカントによつて封建的絶對君主的なものに向ふ武器として用ひられ、今は反抗階級の鎭壓の武器として用ひられる。觀念論的なドイツ社會學にもこの事態が看取される。

規範的人倫的要素を强調するドイツ社會學者は多數存するがその最も顯著な一人としてフィアカントをあげることが出來やう。フィアカントによると共同關係は利益關係の本質的な構成要素である。階級鬪爭や戰爭においても一定の規範が遵守されるのは利益關係の背後においても共同關係が本質的なものとして背景的に潛在してゐるためである。フィアカントは併し殲滅的な戰爭において共同關係が存しないことを認め、これを非社會的な物的關係とよんでゐる。彼の說は要するに、社會關係は總て共同關係を基礎とすることを證明したのではなくして、共同關係に基くものゝみを社會關係となし、然らざるものを物的關係となしたにすぎない。これは甚だ不徹底な理論と謂はなければならぬ。これを根本的に徹底せしめたのが高田博士の結合上位說である。

社會の本質は結合である。分離なき社會は考へられる(『他に對して何等反感、憎惡、對立の傾向なき天使の關係を想像せよ、そこに分離無けれども社會は明かに存在する。』『社會關係の研究』九一頁)が結合なき社會は考へられない。更に、結合はその本質上分離なくして存立し得るが分離は結合を豫想せずしては存立し得ない。フィアカントが謂ふところの物的關係もまた結合を前提とする。博士は種々の點から論證なされた。第一に形而上學的な基礎付づけである。總ての生命あるものを道じて存する生的共同社會が存立する。諸々の生は根源の共同において更に密接な聯絡に立ち從つて特に緊密なる結合を保つ。結合は普通性を有するものであり、如何なる結社も如何なる反爭もこの共同社會關係即ち目的結合を基調として有つ。次に博士は現象學的な基礎付けを試みられた。人々の間の相互的排斥、相互的の遠ざかりを意味する分離は常に相互の理解、相互の追感の上に立つ。然るに相互の追感は一體

感または同一化に基く。一體感は結合の方面であり、結合ある故に一體感がある。かくて一體感が追感を基づけるといふことは結合がそれを基づけることであり、追感を待つて分離があるといふのは結合あつて分離があることである。由來一體感は人類の普遍的事實である。原始人や幼兒の生活にないてそれは極めて廣い範圍に互つて認められる。文化の發達と共にそれは漸次くづれて來たが、尙微弱な程度において殘存し我等の不斷の生活において作用してゐる。諸個人の間に一體感はたえず流れて居り、以て我等の相互の聯絡の根柢を形造つてゐる。かくて一體感が總ての人間關係を支配してゐることは、結合の少くともある形は他の總ての相互關係に伴ひ、これが前提をなし、こさを規定することを意味する。故に結合なきところに分離なし、分離は結合を待ちてのみ存するのである。

分析の綿密精緻なることにおいて高田博士の理論はフィアカントの遠く及ばないところである。だが我等はこの斷案を現實的な社會生活に對照して見なければならぬ。アフリカにおける英國人の猛獸狩的な土人の虐殺は一體感によるものであらうか。北米においてアメリカ人が日本人の家に爆彈を投げたのは內的結合に基くものであらうか。『日本人はアメリカにおいてまちがつたことをした。日本人を愛するアメリカ人は、日本人を正しきに導びかんがために爆彈を投げてこれをたしなめた。いぢめたものの所詮日本人を愛する心に、日本人に對する一體感、日本人との內的結合によるものである。』結合上位說といふ便利な學說の存在を知つて居たらアメリカ人はこう謂ふに違ひない。だが日本人はこれに承服するであらうか。元來全體主義だの結合上位說だのは强者のイデオロギーである。弱者に對する場合にみごとに通用するか對等者や强者にしてはこの高遠な理論は惜しげもなく放棄される。『白人の濠洲の主張』や『北米の移民法』を見ては學者は結上上位や一體感を說くいとまもなく『民族の自衞』を絕叫する。このやうな關係にあつても尙一體感や內的結合があるとしたらそれはナンセンス以外の何物で

もない。

結合上位論者の指示を待つまでもなく人間は廣い範圍に渡つてある關聯を保つてゐる。經濟生活の極度に分化し發達した現在において經濟機構を通して人類社會はある意味において實現されてゐる。だがこの場合關聯の基礎となるものは物質的經濟的なるもので規範的道義的なるものではない。一國内の兩政黨は鎬を削つて相爭ふが一旦事あつて外に向ふときは日頃の確執を捨てゝ相提携し相協力する。階級に分れて相爭ふものさへ革命が經過すれば再び一國民として相協力するそれは謂はゞ一家内の兄弟喧嘩の如きものである。爭ひの背後には嚴然とし相爭ふものを包容するものがある。だがそれは何等道義的なものではなくして彼等が必然的に立入らなければならぬ物質的な生活關係である。人間關係は、殊に物質的生活の極度に分化した現代においては、寧ろ積極的好意的なものとは謂ひがたい。兄弟は他人の始りと謂ひ人を見れば賊と思へと謂ふが如きことばに現れる對人關係の心もとなさ、更に弱肉强食の世情や生活資料獲得の困難なことなどを思ひ合せば、社會は望まれた共存であるより呪はれた共存である。ひとを憎み世を呪ひながらも他人と共存生活を結んで行くのは、生きて行く以上必然的に立入らなければならぬ物質的生活關聯によるものに他ならぬ。人類の生活するところには必ず一定の秩序が存在する。この秩序は生活過程に由來するものであり、平和な生活が營まれる限り妥當する。一旦利割の衝突が起る時秩序や規範的道義は反古のやうに捨てられ實力關係がそれに代る。この場合にも規範的道義的なものが支配すると謂ふのは弱者に對する場合で、對等者や强者に對する場合は喜劇的な論理になる。結合上位說は機宜に應じて使用される『學說』である。社會の認識においてこのドイツ的なものは徹底的に淸算されなければならぬ。

昭和十年一月二十五日印刷
昭和十年二月十日發行
〔隔月發行〕

社會學評論 第四號

定價金五十錢